



TITLE:

# マルクス＝エンゲルスのイギリス革命論(二)

AUTHOR(S):

尾崎, 芳治

---

CITATION:

尾崎, 芳治. マルクス＝エンゲルスのイギリス革命論(二). 経済論叢  
1956, 77(6): 469-490

ISSUE DATE:

1956-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/132476>

RIGHT:

# 經濟論叢

第七十七卷 第六號

---

經濟政策學の理論的性格……………豊崎稔(1)

ロイツ船級協會……………谷山新良(28)

マルクス—エンゲルスのイギリス革命論(2)……尾崎芳治(49)

マルクスとウェーバー……………堀江英一(71)

---

〔昭和三十一年六月〕

京都大學經濟學會

## マルクス・エンゲルスのイギリス革命論(二)

尾崎芳治

### 三 革命の過程

前節でわれわれは、反革命勢力の側に絶對王制、舊貴族、國教會およびその他の封建的諸身分が立つており、革命勢力の側には、新貴族・ブルジョアジーおよび「人民」という「二つの分派」が存在したことをみた。ここでは、この革命勢力の諸分派が、革命の過程でどのように登場するか、とくに、その指導と同盟のどのようなありかたが、革命の各段階を特徴づけているのか、を取扱うことにしよう。

一八四四年にエンゲルスは、『フォルヴェルツ』紙上の一論文で、イギリス革命をフランス革命と比較しながら、つぎのように述べている。

「フランスで憲法制定議會、立法議會、國民公會としてあらわれた三つの段階は、『長期議會』でもたやすくみわけられる。立憲王制から民主制へ、軍事的專制へ、王政復古へ、そして中庸革命 (Use-Milieu Revolution) への推移は、イギリス革命でもはっきりとさわだつて見える。……ジロンド党、山嶽党とエベール派—バブーフ派とに對應するものは、長老派 (Presbyterians) と獨立派 (Independents) とレヴェニラーズ (Levelers) とである」(エンゲルス『イギリスの狀態』—選集補卷五、八九頁)。

エンゲルスを手がかりにして、革命の過程を三つの段階にわけることにしてしよう。すなわち、**〔一〕**立憲君主制闘争の時期、**〔二〕**民主制―共和制闘争の時期、**〔三〕**軍事的専制から「中庸革命」への時期である（革命の段階区分については、堀江英一『西洋經濟史』一六八頁以下参照）。

革命の過程に入るにさきだつて、革命の準備期について若干ふれておくことが必要である。エンゲルスは、『ドイツ農民戦争』（選集第十六卷所収）のなかで、十六世紀に「市民的反対派と農民的・平民的反対派との対立」としてあらわれたものが、ドイツ革命にあつてブルジョアジーと「人民」の対立としてあらわれていることを指摘し、近代社會生誕の全運動をつらぬく反封建闘争のこの二つの系譜が、イギリスでは、ジョン・ウィクリフ對ジョン・ボールにその先驅をもっていることを教えている（前掲書二四―五頁参照）。エンゲルスのこの視角は、イギリス革命にさきだつ時期に、闘争のきわだった二つの流れを區別することを可能にしている。それは、一六二五年の五騎士事件（Five Knights' case）、一七八年の權利請願（Petition of Right）、二九年のエリオットらの投獄、三七年のハンブデンによる船舶税拒否へとつづく、新貴族・ブルジョアジーの主として議會を中心とした抵抗の系譜と、一六〇七年ロンドンにおける徒弟運動の激化と時を同じくして起つたミッドランドの農民蜂起にはじまり、一四年のウィルトシャーの織匠暴動、一六年のイースト・アングリアの農民紛争、二九年の南西部の農民蜂起、三二年、三三年、三六年、三八年、三九年と續發する農民紛争、四〇年の共同地をめぐる暴動とロンドン民衆の反政府デモにいたる、都市騷擾と農民一揆の形態をとつた「人民」抵抗の系譜とである（コスミンスキ―編・武暢夫譯『イギリス革命年表』―經濟論叢七六卷三・四號参照）。エンゲルスは、「封建的束縛からの解放と封建的不平等の排除による法的平等の樹立との要求は、……工業と商業との利益のために要求されたのであるが、このおなじ平等な權利は多數の農民のためにも要求

されざるをえなかった」(エンゲルス『反デューリング論』—選集第十四卷二一九頁)と述べて、兩者の關連を暗示している。こうした二つの方向からの闘争の繼續のうゑに、一六四〇年十一月の長期議會開會から、事態は革命に入る。

### I 革命の進行——立憲君主制闘争または長老派と獨立派

エンゲルスの指摘するとおり、イギリス革命は、フランス革命同様、まず議會の闘争からはじまった。マルクスは、この二つの革命における議會の異なる性格に注目している。それは「フランス革命の第一歩が、……三部會の復活」であり、「舊法と諸身分に基礎をおく舊君主制の風俗習慣を、一個の變革としての絶對王制に抗して、擁護する」議會であつたのに對し、「イギリス革命は、なんら同様の古典的保守主義の事實を示さず」「チャールズ一世が議會に反抗すればするほど、その財政の繼續的な困難によつて、却つてますますその從屬下に陥つた」ような、相對的に強力な、著しくブルジョア的、性格の濃厚な議會であつたという點である(K. Marx, *A Review of Future's Book*, *Marx-Engels on Britain, Moscow 1953*, pp. 344-5 參照)。したがつて、先行していた「人民」の昂揚にささえられつゝ、議會が、すでに「權利請願」に出されていた立憲君主制の要求を、あらためて提出したとき、それは容易に成就されるように思われた。だがマルクスは、議會の立憲君主制要求そのもののなかに、闘争の危機を見出している。議會に代表された新貴族・ブルジョアジーは「下層民が革命では大膽になり、手をだすことを知つて」いたがゆゑに、「できるだけ革命なしに、穩便な方法で、絶對王制をブルジョア的(王制)に轉化させよう」としたのである(マルクス『道德的批判と批判的道德』—選集第二卷八一頁參照)。したがつて、立憲君主制要求はそれ自體、「ブルジョア」と人民とが同盟する以外には貴族はけつしてたおされえない」(マルクス『ライニッシャー・ベオバハター紙の共產主義』

―選集第二卷一八頁)この時期で、鬭争の基本條件に入つた、龜裂の、最初の兆候であつた。そして、この龜裂こそが、「ブルジョアジーのすべての卑屈な恭順さにもかかわらず」(マルクス『道德的批判と批判的道德』―選集第二卷八一頁)「王權それ自體の自己保存本能と、王權の後盾でありその支柱である社會とが、王權を……あらたにそのかして、いったんあたえた讓歩を撤回させ……反革命の冒險をおかさせる」(マルクス『公務執行妨害教唆罪による巡回裁判』―選集第四卷四〇四頁)すきを与えたのであつた。こうして、一六四二年一月三日、ハンブデンら五名の議員を逮捕せんとするチャールズのクーデタが起り、それは結局、事態を内亂にまで押し進めたのである。

しかし、議會の革命軍指導は、依然として、立憲君主制の志向に貫かれていたのであつた。マルクスは「イギリス議會軍の初期の將軍達のあやまり」にふれて、「エセックス(イギリス革命初期の議會軍指揮官)の軍事的失敗は大部分政治上の氣のとがめから發したものである。かれは議會の目的に正直にしたがつたが、しかしけつして熱心ではなかつた。それでかれは大敗北についてなによりも大勝利をおそれたのである」というマコーレイのことを引用している(マルクス『アメリカ問題』―選集補卷一、一九四―五頁参照)。議會の指導理念は「戦争は……ふいふ基礎のうえに復興することを願ふとして、嚴密に事務的なやり方で遂行すべきであり、したがってなによりも原理の問題に影響をおよぼす革命的傾向から自由でなければならぬ」(前掲書一九五頁)という點にあつた。それはまさしく、舊王制に對するとともに、なによりもまづ「人民」の革命的昂揚に對抗する志向である。初期議會軍が、封建民兵に依據し、軍隊指揮のカーリストと地方的セクトにつきまとわれ、その軍事的結果があいつぐ敗北であつたという根據は、まさにこの點にかかつてゐる。

こうした議會の動搖的態度と「人民」抵抗の激化のうちに、新貴族・ブルジョアジーのあいだにはやくから存

在した二つのグループの分裂が明日となる。エンゲルスは、「イギリスとフランスのブルジョアジーの歴史」からみて、「ブルジョアジーには、政治權力を獲得する道は二つしかなかった」のであり、「かれらは兵隊のいない將校の軍隊」であって、この兵隊を「人民」から手に入れるはかなかったがゆえに、「人民」と「同盟を確保するか、それとも上層でかれらと對立している諸勢力、ことに王權から政治權力をすこしづつ買いとるか」しなければならなかった、ことを指摘している（エンゲルス『プロシヤ軍事問題とドイツ労働者黨』―選集第十二卷二二三頁參照）。エンゲルスのこの指摘は、革命の過程で新貴族・ブルジョアジーがそのあいだを動搖した二つの立場のちがいととも、この時期における新貴族・ブルジョアジーの二つのグループ―長老派と獨立派の「人民」にたいする態度の相異を鋭くついているのである。後者は、前者に對抗して、「人民」との同盟の道をえらんだのであった。マルクスは、獨立派―クロムウエルが、前者に對抗して登場したことを示唆している（マルクス『アメリカ問題』―選集補卷一、一九四―五頁參照）。自信に満ちた力強いクロムウエルの姿は、マルクスの論文のなかにたびたびえがかれているのであるが（マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』―選集第五卷三八九頁、マルクス『休戦の批准』―選集第三卷二八六頁參照）、その際マルクスは、クロムウエルの背後にあつた「イギリス人民」と「殘骸になつていた議會」とを念頭においていたのである（マルクス『ベルリンの反革命』―選集第三卷三二六頁參照）。そして、ヨーマンがクロムウエルの主力をなしたというマルクスの指摘（『資本論』―長谷部譯第一卷一〇四頁參照）は、ほかならぬ、ニュー・モデル・アーミイが、この時期での新貴族・ブルジョアジーの進歩的グループと「人民」との同盟の具體的態様であつたことを、示唆しているのである。一六四四年十一月のドニントン・キャスルの軍事會議におけるクロムウエルとマンチエスタの衝突は、この同盟と長老派との對立であり、それは結局、「議員就官自禁令」による前者の手

中への革命指導權の推移をもたらしたのであった。ニュー・モデル・アーミイをかかえるものとして把握することによつてはじめて、その軍組織が或程度、「革命軍は革命的に組織しなければならぬ」という原則を實現しえたこと、したがつてまた、それが急速に王黨軍にたいする勝利をかちとつたことを理解しうる。一六四七年二月、スコットランド軍にとらわれたチャールズの議會への引き渡しをもつて第一次内亂は終りをつげた。

この革命の第一段階を特徴づけているのは、新貴族・ブルジョアジーの長老派と獨立派への分裂と、後者への指導權の推移およびその「人民」との同盟である。

## Ⅱ 革命の高揚——共和制闘争または獨立派とレヴェラーズ

エンゲルスの指摘するところによれば、獨立派の「人民」にたいする指導の具體的根據はともあれ、一般に、一封建貴族と……ブルジョアジーとの對立とならんで、搾取者と被搾取者との……一般的對立が存在し、そしてこの事情こそが、ブルジョアジーの代表者たちに、自分たちはある特殊の階級の代表者ではなくて、なやんでいる全人類の代表者であると主張することができるようにしたものであった」(エンゲルス『反デューリング論』——選集第十四卷八七—八頁)。エンゲルスは、クロムウエルを「ロベスピエールとナポレオンとを一身に體現した」人物であると呼んでいる(エンゲルス『イギリスの狀態』——選集補卷五、八九頁參照)。獨立派が「人民」を指導しえたかぎりにおいて、クロムウエルは、イギリス革命のロベスピエールだったのである。だがマルクスは、一般に共和制の時期が、他のいかなる時期にもまして、新しい「社會問題」の提起される激しい階級闘争の時期、いいかえれば、當面の敵たる絶對王制を壓倒してのち、革命勢力内部にかくされていた新しい階級闘争があらわになる時期、であることを指摘している(マルクス『道德的批判と批判的道德』——選集第二卷六五—六頁參照)。



一六四七年の夏、議會の長老派による軍隊の解散とアイルランド勤務の新軍創設の策謀に對抗する軍内部の動搖の過程で、上級將校<sup>グレンダイ</sup>、獨立派の日和見主義に對立して、下士官・兵<sup>ラッパントフアイ</sup>、「人民」は、レヴェラーズを自らの代表として登場せしめた。この對立はロンドン進軍ののち一層強まったのであった。エンゲルスは次のようにかいてゐる。

「ブルジョアジーはその發生以來、自分の反對物をせおつてゐた。……おおよそのところ、たといブルジョアジーは貴族との闘争で、同時に當時の各種勤勞階級の利害の代表者をもつて任じることができたにしても、大きな市民的運動のあるごとくに近代プロレタリアートの先驅者たる多少とも發展した階級の自主的なうごきがいともあらわれた。たとえばドイツ農民戦争の時代における再洗禮派とトマス・ミュンツァ派、イギリス大革命における平等派<sup>レヴェラ</sup>、フランス大革命におけるバブーフ派のような人々がそれである。まだ未熟だつた階級のこれらの革命的武裝蜂起に並行して、それにふさわしい理論的表明があつた」（エンゲルス『反デューリング論』—選集第十四卷八八頁）。

註 スターリンは古典的ブルジョア革命を念頭においてこうかいてゐる。「ブルジョア革命は勤勞者および被搾取者大衆が勤勞者であり、被搾取者であるというまさにその理由によつて、これら幾百萬の大衆を多少とも長い期間にわたつて、ブルジョアジーのまわりに結集することはできないのである。」（スターリン『レーニン主義の諸問題によつて』—スターリン全集第八卷三七頁）。

われわれはこの對立を、一六四七年八月に出された獨立派の憲法案『建議要目』<sup>Heads of the Proposal</sup>と十月に出されたレヴェラーズの『人民協約』<sup>The Agreement of the People</sup>とのちがいに象徴的に見る事ができる。前者の眼目は、「王權の制限」「立憲君主制」、後者のそれは、「人民主權」「共和制であつた。前者はその内容において、四六年に出でいた長老派の王にたいする妥協案」「ニュー・カースル提案」<sup>Proposition of New Castle</sup>と根本的に異なるところがなかつたのである。獨立派は、新貴族・ブルジョアジーの「グループ」たる性格を露呈した。獨立派とレ

ヴェラーズとの對立は、いまや、前節でふれた二つの革命のやりかた、「新貴族・ブルジョア的君主主義的、自由主義」と「人民、共和主義的民主主義」との對立にはかならなかつた。「革命は人民の權源であつた。革命のうゑに人民はその激烈な要求をうちたてた。革命は、人民がブルジョアジーにあててふりだした手形であつた。革命によつてブルジョアジーは政權に到達した。ブルジョアジーが政權をえた日にこの手形は満期となつた。……革命——人民がそれを口にするときには、これはつぎのことを意味していた。諸君、ブルジョアは Comité de Salut public である、すなわち公安委員會である。諸君はこの公安委員會に支配權をあたえた、だがそれは諸君に諸君の利益について王權と協定させるためではなく、諸君をして王權に反對して、吾々の利益、人民の利益を貫徹させるためであつたのだ、と」(マルクス『ブルジョアジーと反革命』——選集第三卷三六二頁)。他方「ブルジョアジーは確信していた。ブルジョアジーが王權と協定するには、……あきらかにたつた一つの障害がのこるだけだ、それは人民——ホップスのいわゆる強壯だが邪心をもつた小兒——だと。人民と革命だけだ」と(前掲書三六一頁)。一六四七年十一月ブトニイの軍隊會議において、アイアトンとレインボロのあいだに交された論争は、まさしく、この二つの見解の對立にほかならなかつたのである。同じ月のウェアにおけるレヴェラーズの叛亂は鎮壓され、軍内部にあつたその革命の中心組織 the General Council of the Army は解散させられるに至つた。ここでも、さきにみたマルクスの指摘が妥當する。すなわち、新貴族・ブルジョアジーと「人民」との同盟に入つたこの第二の龜裂が、一六四八年五月の第二次内亂のチャンスにチャールズに與えたのであつた。

註 一九〇五年の革命を分析した際のレーニンの次の言葉に注意されたい。

「われ——マルクス主義者は、ブルジョアジーの革命を支持する態度が不徹底で、利己的で、臆病なものだということを、理論

のうえから知っている。……ブルジョアジーはその狭い利己的な利益が満足されるやいなや、徹底的民主主義から『尻ごみする』やいなや……革命に反対し、人民に反対するであらう。のこっているのは『人民』すなわちプロレタリアートと農民である』（レーニン『民主主義革命における社会民主黨の二つの戦術』—國民文庫版一—八一—九頁）。「人民」とブルジョアジーについてのこの理解は、條件がちがひ、事柄のもつウエイトが決定的にちがうとはいへ、なおレーニンが「マルクス主義の革命的武器庫」からなにを學んだかを示す一つの例である。

反革命の脅威を前にして、獨立派はふたたび「人民」と同盟せざるをえなかった。マルクスはこうかいている。

「イギリスのチャールズ一世もまたかれの議會のことをかれの人民に訴えた。かれは議會にたいして武器をとれと人民によびかけた。しかし人民は國王反對を聲明し、人民を代表しない議員をすべて議會からお出し、とどのつまりこうして人民のほんとうの代表者となった議會をつうじて國王の首をきらせた。かれの人民にたいするチャールズ一世のうったえは、こういう結果におわたつた。このことがおこつたのは一六四九年一月三十日のことだつた……」（マルクス『ライニッツシャー・ベオバハター紙の共產主義』—選集第二卷一九頁）。

マルクスのこの言葉は、王を處刑したのがほかならぬ「人民」であつたこととあの「プライドの肅清」の意義とを敎えてくれる。エンゲルスは、國王の處刑が、「臆病で用心深いブルジョアジー」のなしえないところであつて、「人民的ゆきすぎ」によつてのみ敢行されえたことを強調した（『エンゲルス『史的唯物論について』—選集第十四卷六二頁参照）。したがつてわれわれは次のようにいうことができる。「兵士のいない將校だけの軍隊」たる獨立派は、「兵士」も「人民」に對する指導を恢復しえた反面、自分の欲しなかつた「人民的ゆきすぎ」の發現—王の處刑と共和國の宣言—を代償として支拂わねばならなかつたと。しかもこの瞬間においてすら、「人民」の運動が獨立派に從屬していた點に初期ブルジョア革命に共通した特徴がみられるのである（マルクス『ブルジョアジーと反革命』—

選集第三卷三四頁參照)。エンゲルスの言葉をかりていうならば、この同じ瞬間にクロムウェルは、最高度に、「ロベスピエール」でありえたが、同時に、「ナポレオン化」の途上にあった。ウエアの烽起鎮壓にみられるように、イギリス革命にあつては、「ジャコバン獨裁」の樹立される前に、すでに「テルミドール」がはじまっていたのである。

## 註

〔一〕イギリス革命における土地改革について『資本論』のなかに次の敘述がみられる。「彼等(土地所有者—引用者)は封建的土地制度を廢止した。すなわち、土地の負う國家への給付義務をふりすて、農民層その他の人民大衆にたいする課税によって國家の損害を『賠償』し、彼等が封建的名義を有したにとどまる領地の近代的私有權を要求し、最後にかの居住法を制定するに至つた。」(長谷部譯第一卷一一〇五頁)。この言葉は、復古王朝下で法制的確認をうけた(したがつてここでは復古王朝期のこととしてかかれてゐる)ところの一六四六年のナイト・サービス Knight service と後見裁判所との廢止の本質的意義にふれてゐる。すなわち、王にたいする封建的義務を廢止し、農民にたいする封建的名義——コビーホールドその他を残すことによって、地主の土地所有を近代的所有權として確認したイギリス的な「上から」の土地改革の意義である。マルクスは「分割地所有の創設によつて大土地所有を廢止したフランス革命からイギリス革命を本質的に區別する」政治的條件を「ブルジョアジーと大土地所有者の大部分との永續的連合」に求めている(K. Marx, *A Review of Guizot's Book...*, pp. 346-7參照)。(二)前節でふれたようにこの同じ新貴族の土地所有の確立過程は、他方では農民の上層が土地所有の側にくみ込まれる過程である。すなわち、イギリス革命にあつては、「人民」はきわめて破れやすいいわば「うすい皮」につつまれていたにすぎなかつたといえよう。そして人民の上層(都市小ブルと農村富農的要素)の大多數の人民(中・貧農とプロレタリアート)からの分離の激化が、すでに一六四七年からのレヴェナーズと「眞のレヴェナーズ」——ディッツガーズとの分裂しての登場に照應してゐるのではないだらうか。上の土地改革の過程と、のちにふれるアイルランド遠征がこの分裂を促進してゐるのである。(三)こうした土地所有の側と「人民」の側との二つの條件が、フランス革命ととなり、イギリス革命が完全な「人民的恐怖政治」を知らない弱さを規定し、それがまた、この革命の保守的性情を決定したと思われる。さきのマルクスの指摘は、この點を解明する手がかりを與えている。また、エンゲルスがフランス革命とことなるイギリス革命の「上から」の妥協的性情を、前者におけるローマ法の採用に對する、後者におけるゲルマン法の殘存のうちに象徴的にみている點にも注意されたい(エンゲルス『史唯物論に

ついで』——選集第十四卷六六頁参照）。なおこれらの點については、近々本誌に連載されることになっている武暢夫氏の、ソ  
ヴェト學界のイギリス革命研究を紹介した諸論文をみていただきたい。

レヴェラーズやディッガーズの果した役割とそのたどった運命とを、エンゲルスの次の一文から續みとることができる。

「こうしたより急進的な要求も個々の場合は實現されもしたけれども、多くの場合は一瞬間だけであつて、もつと穏和な黨派がふたたび優勢となつて最後に獲得した成果は、全部がまたは一部分ふたたびうしなわれていつた。そして敗北者はうらぎりをさげんたり、また敗北を偶然のせいにしたりした。しかし實際の事情はたいていつぎのとおりであつた。すなわち、最初の勝利で獲得された成果は、もつと急進的な黨派の第二回の勝利によつてはじめて確立されたのであり、それが確立され目前の必要事が達成されると、急進派とかれらの成功はふたたび舞臺から姿を消したのである。十七世紀のイギリス大革命よりはじまつた近代のあらゆる革命がこうした特徴を示している」（エンゲルス『フランスにおける階級闘争への序文』——選集第五卷一六〇—一頁）。  
こうしてあの「人民」的昂揚も、結局クロムウエルのための道をはき清めた結果となつた。これらの黨派も運動の表面から姿を消し、エンゲルスのいわゆる「軍事的専制」の時期がおとずれるのである。

この革命の第二段階を特徴づけているのは、新貴族・ブルジョアジーと「人民」の對立と、前者による後者の昂揚の成果の横奪、すなわち後者の敗北である。

### Ⅲ 革命の退潮——護民官制から名譽革命へ

さきに引用したエンゲルスの急進派にかんする敘述は、「人民」勢力義退の原因解明に一般的解答を與えている。だがどこへ、なにを契機として消えていつたかは、依然として殘された問題である。エンゲルスはクロムウエル時代にふれて、「アイルランドを軍事的に支配し、ここに新しい貴族をつくりだす必要がなかつたら、イギリスでも

事態はべつの経過をたどったということだけは、僕にはたしかであるように思われる」(『一八六九年十月二十四日付エンゲルからマルクスへ』—選集第八卷五一九頁)とかいている。マルクスもまたこの考えをうけいれて(『一八六九年十二月十日付マルクスからエンゲルスへ』—選集第八卷五二八頁参照)、「アイルランド人をイギリスの拓植民によって驅逐しようとした：クロムウエルの蠻行」に言及した(前掲書五一三頁参照)。「革命的傾向」をもった軍隊のアイルランド派遣は、暑毒地の分給という餌(しかも、地券 *debuture* の事實上の發效延滞とその間における一部による地券買集めを許したこと)によって、「人民」勢力の分裂を促進し、それを骨抜きにする効果を生んだのである。マルクスは、「アイルランドがイギリス地主制の牙城」にかえられ、アイルランドとイングランドの「人民」勢力が「敵對する二つの陣營」に分裂させられたことを示唆している(マルクス『國際労働者協會總評議會から在ジュネーヴラデン系メイス人連盟協議會にあてた回狀』—選集第八卷五三二頁参照)。本質的に味方であつたはずの兩國の「人民」は、カトリックとプロテスタントという宗教的ちがいに加うるに、一方が他方にたいする征服者として現れることによって、互いのうちに同盟者を見出すことができなかった。「イギリス自體における人民の運動は、アイルランド人との確執のためにすべて麻痺状態におかれる」こととなつたのである(『マルクスからクーゲルマンへ』—選集第八卷五二四頁参照)。

「土地寡頭制の前哨」のアイルランドでの建設が、一方で舊王黨と新貴族・ブルジョアジーを接近せしめ、クロムウエルの軍事獨裁の條件を作りだすとともに、他方「人民」を決定的に分裂させたのであつた。こうして、このアイルランド遠征とレヴェライズの敗北こそが、まさしく、イギリス革命の保守的性格(「地主的・大ブルジョア的要素の優勢なブルジョア的革命」への移行)を決定したのである。マルクスが、「事實クロムウエル治下のイギリス共和國は、アイルランドで破産したのだ。前車の轍をふむなかれ」(前掲書五二五頁)とかいたとき、ほかならぬこ

のことを指摘しているのである。

註

エンゲルスは「ある民族が他の民族を隷屬させることが、この隷屬させる側の民族にとってどんな不幸なことであるかは、アイルランドの歴史にみるができる」(『エンゲルスからマルクスへ』―選集第八卷五一九頁)とかいた。かれは、五年後にこの教訓を「他國民を抑壓している國民は、自分自身をも解放することはできない」(エンゲルス『ポーランド人の宣言書』―選集第十三卷八七頁)という有名な命題に定式化した。この命題は、のちにマルクス主義の後繼者達によつて帝國主義と革命運動との關連についての法則に發展させられた。

アイルランド遠征を契機として、「所有者階級の妥協」が成立し、軍事的專制が樹立されたとき、「共和國の破産」―王制復古への道は決定されていたのであった。エンゲルスは、一六六〇年のステュアート家の復活を、「不可避免的反動」の歸結としてとらえている(エンゲルス『史的唯物論について』―選集第十四卷六二頁參照)。だが同時にそれは「反動化のゆきすぎ」の出發點となり、「新しい重心」によつて再調整されねばならなかったのである(前掲書六二頁參照)。マルクスは「絶對王制から立憲君主制への推移は一般に、共和制を経てのちはじめて成就するものであるが、そのときでも舊王朝は無用のものとなり、王位篡奪者たる傍系者に地位を譲らざるをえなす」(K. Marx, *A Review of Girard's Book...*, p. 346)とかいている。復古王朝崩壞の直接的諸原因のうち、マルクスは二つの點を指摘している。〔一〕「宗教改革によつてできた新地主のカトリック復活にたいする恐怖」と「商工業ブルジョアジーの、かれらの取引には決して適合しなかったカトリックにたいする嫌惡」、〔二〕「ステュアート家が、自分とその宮廷貴族の利益のために、イギリス工業全體を商業とともに、フランス政府に賣り渡した冷淡さ」である(同前、p. 346參照)。こうして一六八八年、いわゆる名譽革命が起つた。

エンゲルスは、これを「貧弱な事件」とよび、「自由主義的史家」による「名譽革命」という呼稱を嘲笑した。

(エンゲルス『史的唯物論について』—選集第十四卷六二頁參照)。マルクスは、このいとうべき「穩健さ」の根據を、新貴族とブルジョアジーの同盟がすでに確立していたことに求めている(K. Marx, *A Review of Guizot's Book...*, pp. 346「參照」)。「細かい事柄については、いろいろ紛争がなかったとはいえないが、全體としては、貴族的寡頭政治はかれら自身の經濟的繁榮が、工業的および商業的ブルジョアジーのそれと不可分に結びついていることを知りすぎるほど知っていた」(エンゲルス『史的唯物論について』—選集第十四卷六四頁)のであった。したがって、ウィリアム三世が迎えていれられたとき、それは、革命の過程でより強化された新貴族・ブルジョアジーを中軸とする所有者階級の連合を、最終的に支配の座につけ、その一貫した要求たる立憲君主制を實現することにはかならなかった。まさしく『「名譽革命」』はオレンヂ公ウィリアム三世とともに、地主的および資本家的貨殖家をも支配者たらしめた「マルクス『資本論』—長谷部譯第一卷一〇五—六頁)のである。マルクスは、このオランダ公子の治下を「ホイッグ黨がイギリス帝國の收入を賃借し、イングランド銀行が設立され、……保護關稅制度が確立され、ヨーロッパにおいて勢力均衡が最終的に確立された時代」として、また「議會の國民的承認」による事實上の「獨占の時代」として特徴づけている(マルクス『東インド會社、その歴史と活動の成果』—選集第八卷一九〇頁參照)。それは、イギリス海外帝國建設の一出發點をなしているのである。だが同時にマルクスは、この新貴族・ブルジョアジーの勝利の時代にあつて、「下院が一般平民から議會にたいする代表權をうばつた」ことを指摘して、「ここでもほかの場合におけると同様に、……ブルジョアジーの決定的勝利が、人民にたいするもつともあからさまな反動と同時に起こっていることの例を見いだすのである」(前掲書一九一頁)と注意することを忘れなかった。

この革命の最終段階を特徴づけているのは、新貴族・ブルジョアジーを中軸とする大所有者連合の成立と、それ



を基礎とした軍事獨裁、さらに立憲君主制の樹立、およびその「人民」にたいする最終的支配の確立である。こうして、「イギリス革命は、中庸政府と一つの國民的政黨（トリーとホイッグ引用者）の創立とをもつておわつた」（エンゲルス『イギリスの狀態』―選集補卷五、八九頁）のであつた。

#### 四 イギリス革命のイデオロギ―

マルクスは、ブルジョアジーの反封建闘争のイデオロギ―を解明するためには、「ブルジョアジーが、……封建的生産關係を廢止するにいたるほどかれらの生活條件を發展させてきた點」までの、ブルジョア的生産諸關係發展の歴史を説明しなければならないこと、したがつて、「封建的所有諸關係の廢止と近代ブルジョア社會の確立とは、核心としての一定の理論的原則にもとづき、そこからさらにすすんだ諸結論をみちびきだす、ある教義の結果ではけつしてなかつた」のであつて、むしろ、「諸理論は、實踐的運動の理論的表現にはかならなかつた」がゆゑに、運動そのものの發展程度に應じて、「より多くあるいはより少く空想的であり、獨斷的であるかを、正確に追求することができる」ことを強調した（マルクス『道德的批判と批判的道德』―選集第二卷八七―八八頁参照）。

註

だがマルクス・エンゲルスの見解を単なる經濟決定論に解消することはあやまりである。マルクス主義は「種々のイデオロギ―的領域に獨自の歴史的發展をみとめないものであるから、……それらのものにどんな歴史的作用をもみとめないであらう、という」マルクス批判家たちのばかげた中傷にこたえて、エンゲルスはかいてゐる、「この根底には、原因と結果とを固定し、相互に對立した極とするふつうの非辯證法的な考えかたがよこたわつてゐる。交互作用はまったく看過されてゐる。すなわちある歴史的要因は、ひとたび他の、けつきよくは經濟的な事實によつて、この世におしだされるやいなやこんどはその周圍にたいして、そしてそれ自身の原因にたいしてさえ、反作用をおよぼしうということを、この紳士たちは、ほとんど故意にわ

すれているのである」(『エンゲルスからメーリングへ』―選集第十五卷五三頁)と。そして逆に、自然史とこととなり、社會史にあっては「意識された企圖、意欲された目標なしには、なにごととも發生しない」と述べて、歴史の經過を支配する「内面的・一般的法則」があくまで基本ではあるが、同時に、イデオロギーの問題が「個々の時代と事件との歴史的研究」にとつて重要であることを指摘している(エンゲルス『ルードウィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲學の終結』―選集第十五卷四八九頁參照)。しかしまたエンゲルスは、かれとマルクスが當時の觀念論と對決して「經濟的基礎事實から政治的、法律的その他のイデオロギー的觀念によつて媒介された行動をみちびきだすことに重點を……おかねばならなかった」がゆえに、「形式的な面――これらの觀念がいかにしてうまれるか――を等閑にふしてきた」こと、それが「やがて論敵の誤解に絶好の機會をあたえた」ことを自己批判している(『エンゲルスからメーリングへ』―選集第十五卷三二頁參照)。われは、プロレタリア意識とプロレタリア黨の革命における目的意識的な活動の役割については、レーニンの勞作『なにをなすべきか』(レーニン二卷選集2所收)をもっている。ブルジョア革命におけるブルジョア・イデオロギーの役割りと、その内容のプロレタリア思想とことなる理論的限界についても、積極的な論理的考察が必要である(なおルカーチ『階級意識論』―平井俊彦譯―を參照されたい)。

十三世紀から十七世紀にかけてのヨーロッパのすべての反封建闘争は、多かれ少かれ宗教的、な外被をまとうて闘われている(エンゲルス『ルードウィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲學の終結』―選集第十五卷四六九頁參照)。イギリス革命は、こうした特徴をもつた大闘争の最後の例である(エンゲルス『史的唯物論について』―選集第十四卷六二―六頁參照)。

エンゲルスは、この時期にあつては、教會が「封建體制を祝福された聖なる榮光をもつてつつみ、またみづからは、この封建制をひながたにしてみづからの教會内に職階制度をつくりだしていた」(エンゲルス『空想より科學への社會主義の發展』―選集第十四卷五九頁)こと、そのために「教養そのものが本質的に神學的な性格をおび……教會の

ドグマはそのまま政治上の公理であつた。そして聖書の聖句は……法律と同じ効力をもつていた」(エンゲルス『ドイツ農民戦争』―選集第十六卷二三頁)ことを説明している。この事情こそが、「封建制にたいする……すべての革命的な社會的政治的な教義が、同時にすぐれて神學的な異端たらざるをえなかつた」(前掲書二三頁)理由である。エンゲルスによれば、この異端に「最も直接的な利害をもつていた階級は、ブルジョア階級であつた」(エンゲルス『史的唯物論について』―選集第十四卷六〇頁参照)。それは、イギリス革命にあつては、プロテスタンティズムの一種としてのピューリタニズムとして現われたのである。

エンゲルスは、プロテスタンティズムの最初の一人、ルッターを、絶對王制成立期における騎士的・市民的陣營のイデオログとしてとらえ(エンゲルス『ドイツ農民戦争』―選集第十六卷二九―三四頁参照)、かれが、「まさに絶對王制が要求していたような宗教」(エンゲルス『史的唯物論について』―選集第十四卷六一頁)をつくりだしたことを指摘した。だがカルヴィンは、はじまろうとするマニフエクト、時代ブルジョア革命時代のイデオログであつた。「ルッターがやぶれたところで、カルヴィンは勝つた」(前掲書六一頁)のである。資本主義とプロテスタンティズムの關連について、エンゲルスは、プロテスタント的エトス、したがつてそれをになう人間がまづ存在し、それが近代資本主義をつくりだしたとみるウェーバーの見解とは逆に、プロテスタントの教説そのものを、そこでは經濟法則が盲目的な自然法則として、個人的な意圖から離れて貫徹するところの、近代資本主義ことにその誕生の時代の經濟過程の宗教的イデオロギー的表現としてとらえている。カルヴィンの『恩恵の選び』は、商業界で自由競争に成功するか破産するかは、……個々人にかかわりもない諸事情によるものであるという事實を、宗教的に表現したものであつた。『されば欲する者にもよらず、はしる者にもよらず、ただあわれみたまふ者に』(新約

聖書ロマ書九章十六節)、すなわちすぐれた未知の經濟的諸力による、というのであった。そしてこのことは、ことにこの經濟事情變革の時代においてまったく眞實であつた」(前掲書六一頁)のである。そしてカルヴィンの教會制度が「民主的」であつたかぎり、どうして「現世の國々が依然としてその國王だの司教だの領主だのに隷屬しているということが……ゆるされようか」(前掲書六一頁参照)。こうして、それは、「イギリスで演じられたブルジョア革命の第二幕にたいしてイデオロギーの衣裳を提供した。ここにカルヴィン主義は、みづから當時のブルジョア階級の利益の眞に宗教的な扮装であることを立證した」(エンゲルス『ルードウィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲學の終結』—選集第十五卷五〇二頁)のである。

だが、異端の「聲をあげたのは、まづ諸大學や都市の實業家たちであつたが、この関の聲は、やがてまた不可避免的に地方の人民大衆、農民たちのあいだに、つよく反響」せざるをえなかつた(エンゲルス『史的唯物論について』—選集第十四卷六〇頁参照)。エンゲルスは、中世後期の反封建闘争に二つの形態を區別している。すなわち、「封建制にたいする新興都市の反抗」と「むきだしの農民反亂」である(エンゲルス『ドイツ農民戦争』—選集第十六卷二三—四頁参照)。かれは、この「二つの形態の中世的異端のなかに……市民的反対派と農民的・平民的反対派との大いなる對立の先驅」(前掲書二四頁)を見いだしている。そして、「市民的・ルツターの」なプロテスタンティズムや「イギリスのピューリタン」はまさに、市民的異端の系列にほかならなかつた(前掲書五五頁参照)。「農民と平民の欲求の直接の表現であり、ほとんどつねに反亂と結びついていた異端は、これとはまったくべつの性格をもっていた。それはなるほど……市民的異端のあらゆる要求をわけていたが同時にかぎりなく前進していた」(前掲書二五頁)のである。

エンゲルスは、「賤民的資本主義」と「資本主義の精神」の持主とを區別するウェーバー的視角と異なり、禁欲倫理の解明に、上の二つの異端の視角を一貫させることによつて、二つの本質的に異なる禁欲主義——平民的・プロレタリア的禁欲主義とブルジョア的節約とを鋭く對比している。前者は「一面では支配階級にむかつてスパルタの平等の原理をつきつけるものであり、他面では、社會のもつとも下づみの層がこれなしにはけつして運動にうつりえないもの」であり、「かれらの革命的エネルギーを展開」するために「かれらをして現存の社會秩序と和解させているいっさいのものを、みづからふりすてる」ことを要求するものであつた（前掲書五五頁参照）。「この平民的・プロレタリア的禁欲主義は、そのあけずりの狂信的な形式からみても、その内容からみても、市民的ルツター式のモラルやイギリスのピエーリタンが説教するようなブルジョア的禁欲主義とは、まったくちがつている」（前掲書五五頁）。エンゲルスは、この倫理をミュンツァ派や再洗禮派（この派は、イギリス革命にあつても、クエーカーや第五王國派とともに、レヴェラーズやディッガーズとまざり合つて現れている）の教説のうちに見いだしたのである。一方ブルジョアの禁欲主義の「全祕密は、要するにブルジョア的節約なのである」（前掲書五五頁）。マルクスは、こうかいてゐる。

「貨幣蓄藏者は金という物神に彼の肉體的快樂を犠牲とする。彼は禁欲の福音を信奉する。……勤勉・節約および貪欲が彼の主徳をなし、多く販賣し少く購買することが彼の經濟學の總體をなす」（『資本論』——長谷部譯第一卷二二三頁）。

#### 註

「市民的反對派」と「農民的・平民的反对派」とのあいだに一線をひき、前者の「不決斷」を後者の「革命性」に對置するエンゲルスの視角は、マルクス・レーニン主義に眞に特徴的なものである。レーニンはこうかいてゐる。「世界のブルジョアの解放運動で『左翼プロット』戰術に事例と模範を提供しないようなものは一つもないのであつて、そこではこれらの運動の

すべての勝利の要因はこの戦術の成果、この方向での戦の指導とつねに結びつき、自由主義の動搖と裏切りとに反対している。『左翼ブロック』戦術こそが、まさしく都市『平民』(今日のプロレタリアート)の民主主義的農民階級との同盟こそが、十七世紀のイギリス革命と十八世紀のフランス革命とにその高揚と力とを興えたのである。マルクスとエンゲルスはそれについて一八四八年にたび／＼いつたしまたずつとあとにも言及した。……重要なことは、マルクスもエンゲルスともに『ルツターの騎士的』(二十世紀はじめのロシア語に直せば自由主義的地主的)反対派を『平民的・ミューンツェルの』(同じように直せばプロレタリア的・農民的)反対派より優先することを明白な誤りと考えて、社会民主主義者にとって絶対に不適當なことだと見たということである」(W. I. Lenin, „Prinzipielle Fragen der Wahlkampagne“, Zur Deutschen Geschichte, I, s. 283 以下)。レーニンはここで十六世紀から二十世紀にいたるすべてのブルジョア革命の分析にさきの視角が適用されうることを強調しているのである。

またエンゲルスは、ブルジョアジーが「封建的市民階級の穀をやぶりける瞬間から、……つねにしかも不可避免的に、自分の影法師であるプロレタリアートにつきまとわれている」事情を説明して、「同様にブルジョアの平等の要求は、プロレタリア的な平等の要求につきまとわれている」ことを指摘した(エンゲルス『反デューリング論』—選集第十四卷二二〇頁参照)。前者の内容は「階級の特権の廢止」であり、後者は「階級の廢止」である(前掲書二二〇—二二一頁参照)。われわれは、こうした「農民的・平民的」な倫理と平等についての要求を、「新貴族・ブルジョアジー」と對抗して「人民」を代表した左派諸黨派の主張のなかにみいだすことができる。マルクスは、「社会主義と共產主義が、……イギリス、フランスおよび北アメリカから出發した」ことを指摘して、「立憲王制が除去された瞬間に、ブルジョア革命の内部にはじめてたちあらわれた」「もつとも徹底的な共和主義者」の一例として、レヴェエーヌをあげている(マルクス『道徳的批判と批判的道徳』—選集第二卷六二頁参照)。マルクスによれば、これらの黨派は「侯領制と共和制にかんする社会問題」が解決されても、かれら自身の社会問題はなんら解決されていない、とい

うことの理解をくみとっていたのであった（前掲書六二頁参照）。

イギリス革命における宗教的扮装は、さらに、積極的な意義をもっていたのである。マルクスは、「クロムウエルとイギリス國民が、舊約聖書から、自分らのブルジョア革命のためのことばや情熱を借りた」のは、ほかならぬ「ブルジョア的に制限されたその闘争内容を自分自身にかくすため」だったとかいている（マルクス『ルイ・ボナパルトのブルジョア革命』——選集第五卷二八四頁参照）。エンゲルスは、「まちがった意識でなされ」、「本来の原動力のことはかれにはしられず」、「あやまった、またはみせかけの原動力を想像する」ブルジョア的なイデオロギー的過程に言及している（『エンゲルスからメーリングへ』——選集第十五卷五三二頁参照）。だが、現實の革命が、新貴族・ブルジョアジーを中心とした大所有者階級の妥協に終り、この線上での資本主義の發展が公認されたとき、いまやそれを徹底的に押し進めるべきブルジョア合理主義こそが必要であった。まさに「イギリス社會のブルジョアの變革がなしとげられてしまうと、ロックがハバーク（ヘブライの豫言者——引用者）を排斥した」（マルクス『ルイ・ボナパルトのブルジョア革命』——選集第五卷二八四頁）のである。エンゲルスによれば、「ロックは、宗教でも政治の點でも、一六八八年の階級和解の子であった」（『エンゲルスからシュミットへ』——選集第十五卷五二頁）。他方、教會制度そのものも、この妥協的解決にふさわしく、「カルヴィン化された國教會」の成立に結果したのであった（エンゲルス『ルードウィヒ・フオイエールバッハとドイツ古典哲學の終結』——選集第十五卷五〇二頁参照）。

だがこうした妥協的解決に終ったとはいえ、マルクスとエンゲルスは、イギリス革命のフランス革命にたいする思想的影響を大きく評價している（K. Marx, *A Review of Guizot's Book*, p. 344）。「フランス革命の自由思想は、ほかならぬイギリスからフランスへもたらされたものであった」（ibid. p. 344 参照）。エンゲルスは、イギリスにあって、

「貴族的・祕傳的」であつたホッブス、ボーリンブロークらの唯物論が、ロツクをへて、「イギリスからフランスに移殖され、ここでデカルト説から派生したいま一つの唯物論哲學……と融合し、……まもなくその革命的 성격があかるみにててきた」こと、それがやがて「フランス大革命にさいしては、……共和主義者たちやテロリストたちとその理論的旗印をあたえ、またあの『人權宣言』に……その臺本を提供した」ことを分析している(エンゲルス『史的唯物論について』―選集第十四卷六上―六頁参照)。イギリス革命の思想は、アメリカ革命やフランス革命の思想に流入することによって爾來一世にわたつて、ブルジョア革命思想の源流となり、今日でもその革命的核は、マルクス主義のなかに生きているのである。(一九五五年二月九日初稿 一九五六年二月二十四日改稿)

(本稿は本年一月の經濟學會月例研究報告會において發表した報告をまとめたものである。)